

## 題目 秩序の違いが心の文化差に与える影響—文化形成実験による検討—

氏名 堀越智視

指導教員 高橋伸幸

従来の文化心理学では、文化的自己観によって心の文化差の説明がされてきた。しかし、この考え方における諸問題を受け、新たな理論として社会的ニッチ構築理論が提唱された。この理論は、個々人の予測と行動の結果がマクロ現象である社会的ニッチを生み出し、個々人がそのニッチに適応した行動をとるという過程を繰り返すことで、社会全体及び個々人の心や行動原理が形成されるという理論である。この理論では、始点と同じでも個々人の些細な差によって異なるマクロ現象が生じることが示されている。この過程を経て形成されるものとして社会秩序が挙げられる。実際に、商取引における代理人の不正行為を防ぐために、それぞれ評判による秩序と法による秩序を構築することで解決した事例がある(Greif, 1994)。現在、東アジアでは評判型の秩序が見られ、北米では法による秩序が見られると考えられている。社会的ニッチ構築過程を経て形成された秩序によって、各人は特定の心を持つようになったとは考えられないだろうか。つまり、秩序への適応行動を繰り返すうちに、特定の心の性質や行動原理が自動的に発動するものとして各人に備わった可能性がある。そこで、東アジア型の秩序への適応行動を繰り返すことで東アジア型の心となり、北米型の秩序への適応行動を繰り返すことで北米型の心が形成されるという仮説を検証するため、実験を実施した。秩序の構築と秩序への適応行動が必要となる、繰り返しのある投資ゲームを条件操作として行い(実験 1)、その後参加者は文化特定の心理指標や認知課題に回答した(実験 2)。実験では統制・評判・制度条件を用意した。実験 1 では参加者は 3 つの集団に分かれ、個人間でやり取りを行った。実験の予測は、集団内での話し合いによって秩序が維持できる評判条件では集団が閉ざされ、各人の寄付によって司法制度を維持できる制度条件では集団が開かれ、秩序構築のできない統制条件ではあまり取引が行われず、であった。その後の実験 2 では、評判・統制条件において東アジア型の心が現れ、制度条件では北米型の心が現れると予測した。分析の結果、投資・返報活動から見た集団が開かれる程度は、評判条件で最も高い傾向があり、予測とは異なる結果であった。また、心理指標や認知課題を見ても、予測と異なり条件差は見られなかった。本研究では、条件操作が不適當であり仮説の検証ができなかったため、更なる研究が望まれる。